

ラザロと金持ち

ルカによる福音書一六章19〜31節

そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、アブラハムとその懐にいるラザロとが、はるかかなたに見えた。(23)

贅沢な暮らしをする金持ちの家の前に、ラザロという貧しい病人がいました。二人が死んだとき、ラザロは天国にて信仰の父アブラハムの懐に抱かれ、金持ちは陰府の国で苦しんでいました。しかも、この二つの国の間には決して超えることの出来ない深い断絶があるということです。この譬えは、永遠の世界における決定的な違いを表しています。富むことが悪いというのではありません。問題は、私たちが何を頼りにして生きていくかということです。「神はわが助け」という名のラザロは物乞いをしながら、ただ神だけを頼みとして生きていました。何を頼りにし、何を助けと仰いで生きたかが、二人の永遠を決めました。アブラハムの子にふさわしいのは、「神はわが助け」とする者です。私たちはひとすじに神に寄り頼んで生きて行きたいものです。